

## 38 度線を越えた！

はじめに

「西暦二〇〇〇年までカウントダウン、ついに百日を切りました。みなさん！ お元気ですか？ さわやかワイド青木輝あおきひかるのハッピー TODAYあおきひかるの青木輝です」

いつものように、わたしが司会をつとめる「SBS静岡放送ラジオ」の番組がはじまった。わたしは放送中に、子供の時にソ連に抑留おとくりゆうされた話をするところがある。その後すぐに反響はんきやうがあつて、「実はわたしも満州まんしゅうからの引揚者ひきあげしやですが、子供こどもでも抑留りゆうされることがあるのですか？」という、はがきがまいこんでくる。

「そうか！ 子供でソ連に抑留されたのはめずらしいんだな」と思った。そして、「忘れかけていた記憶を思い出しながら書いてみよう」と決心して書きだした。

### 神様のばちより立たされたほうがいい

わたしは昭和十年九月七日、満州国の鞍山で生まれた。鞍山には世界一の製鉄所があり、一部の日本人の住宅には普通の水道のほかにお湯も出るようになっていた。トイレも水洗でわたしの家には電話もあった。子供たちが三輪車に乗って遊ぶときも、家の中の廊下で十分だった。当時日本では多くの家は水道などなく、井戸であったし、トイレはくみ取り式だった。

昭和六年、満州事変がおきて、多くの兵隊が必要になったので、男の子はとも喜ばれた。わたしの上は姉が四人。初めての男の子ということもあって父は大喜

※抑留……無理やりに連れていかれて収容されること  
※満州……53ページの注を参照

びして花火を上げて祝い、わたしを取り上げてくれた産婆さんばさんは「この子は『おぼつちやま』だから」といって、卵たまごでわたしの体を洗あらってくれたという。姉はどうして男の子だと卵たまごで体を洗あらうのだらうと不思議に思ったそうだ。それから五年後、父が開原かいげんの銀行に、支店長してんちやうとして転勤てんきんしたので家族も開原かいげんに引越こした。

そのころ、満州まんしゅうの鉄道は、新京しんきやう（長春ちやうしゆん）と大連だいれんとの間が、南満州鉄道みなみまんしゅうといわれ、東海道本線と同じように、世界でも指折りの鉄道で、そこを走っている『あじあ号』は有名だった。その車両は全車両エアコン付きだった。『あじあ号』の走る沿線えんせんの主な都市には、日本人だけの街ができていて、日本人だけの幼稚園ようちえんと小学校があった。

昭和十六年、わたしは幼稚園ようちえんに入った。その年の十二月八日に、日本はハワイの真珠湾しんじゆわんを攻撃こうげきして太平洋戦争が始まった。

「いよいよやりましたね、これで日本の領土りやうどがもっと広くなれば、ますます豊ゆたかになりますね」

と、父が家にきた客と話していたことを覚えている。

わたしは昭和十七年四月に国民学校一年生になった。その前の年から小学校は国民学校と呼び名が変わった。「元気で勉強、うれしいな。国民学校一年生」という歌を習った。

わたしたちは、必ず奉安殿※ほうあんでんの前で拜おがんでからでないと教室に入ってはいけないかった。だけど、ぼくはその日、時間ぎりぎりに登校した。もう始業のベルが鳴り終わっていたけれど、奉安殿ほうあんでんに寄よって教室に行った。教室に着いたら、とつくに授業じゅぎょうが始まっていた。遅刻ちこくの罰ばつとして廊下ろうかに立たされた。だけど「拝礼はいれいをしなかった者は、神様が見ていてきつとばちがあたる」と先生からいわれていたので、神様のばちがあたるくらいなら廊下ろうかに立たされていたほうがいいやと考えてひとり満足していた。

### 汽車にみせられて大冒険だいぼうけん

※奉安殿……学校の敷地しきちの中につくられた建物たてもので、天皇てんのうの写真などがかざられていた

国民学校の二年生になり、汽車に夢中むちゆうになった。ある日曜日、親にないしよで駅に行き、改札口のすきまからするりとくぐりぬけて客車に飛び乗った。それでもあまり長く乗っているとこわいので、次の駅で降りて反対側に停車している列車に乗ってすまして開原駅かいげんえきに帰ってきた。二年生がひとりだけで乗る汽車の旅はスリル満点だった。たちまちいたずら無賃乗車むちんじょうしゃに夢中むちゆうになった。

これに味をしめたわたしは、日曜日になると家族にないしよで駅に向かって走った。

その日はいつもよりきれいな汽車が止まっていたので、うれしくなって乗りこんだ。しかしそれは急行でもものすごいスピードで駅を飛ばして走った。急行ということとがわからなかったのだ。見たこともない景色が続き、三時間くらい走ってやつと駅に着いた。そこはまったく知らない駅の四平街しへいがいだった。わたしはすぐに飛びおりにいつものように機関車かいげんえきが開原駅かいげんえきに向いていることを確かめて乗った。

※無賃乗車……お金をはらわずに列車などに乗ること

しかし落ち着いて車内をよく見ると暗くてきたない。乗っている客もほとんど中国人で満員だった。一つだけ空あいていた席すわに小さくなって座すわっていたが何だかおかしい。前の列車に比べてスピードがかない。それに窓から見える景色はいつもと違ちがう。だんだん民家が少なくなつてやつと開原かいげんと違ちがう方向ちがに走っていることに気がついた。「どうしよう、どうしよう」。心細くなつてなみだが出た。周りは中国人ばかりだ。そのうちに体の大きな金持ちらしい格好かっこうの男の人が手招てまねきしてわたしを自分の席すわとなりすわに座すわらせ、手まねで「自分といっしょにくれば馬うまに乗せてやる」といった。前に母から、「日本人の子をさらつてサーカスに売つたりする中国人がいるから、ひとりで遠くに行つてはいけないよ」と、いわれていたことを思い出した。わたしが急いで逃にげようとすると、むずつと男にうでをつかまれた。わたしはこわくなつて大声で泣いた。まわりの中国人が泣き声にびっくりしてこちらを見たので、男はわたしのうでをはなした。わたしは泣きながら次の客車まで逃にげた。そこは二等車だった。

日本人に気がついてもらいたくて、わあわあ泣きながら二等車の中を行ったり来たりした。そのとき「おぼっちゃんどうしたの？」と片言の日本語で声をかけてくれる人があった。背広せびろを着ていて医者みたいだった。久しぶりに日本語を聞いた気がしてほっとして「開原かいげんに帰りたい」といった。

「この汽車は線路せんろが違ちがうから開原かいげんには行かないよ。ひとりではあぶないから」といって、次の停車駅で中国人の駅員にわけを話してくれてわたしをあずけてくれた。

そのおかげで急行の『はと』にも乗れて無事帰ってこられた。

朝、家を出たのに、もう大きな赤い夕日ゆづりが地平線にしずんでいた。

終戦、そしておそろしい日々

昭和二十年四月。

わたしは、国民学校四年生になった。

日本が戦争に勝っていたころ、ラジオニュースの始めには、いさましい軍艦くわんかんマー

千を流して、敵の飛行機を何機撃墜した、敵の船を何隻沈没させたとかいうニュースが放送されていたが、このころになると、戦場は負け戦で悲しい歌を流していた。昭和二十年八月十五日、ぼくが夏休みの日課であった学校のプールに行こうとしたら、「今日は大事な放送があるので家にいなさい」と母にいわれた。ラジオの前には近所の人も集まってきてみんなで正座して聞いた。

それは天皇陛下の終戦を知らせるラジオ放送だった。

わたしはむつかしくてよくわからなかったが、だれかが「戦争に負けたようだ。わたしたちはこれからどうなるのでしょうか」と目を真っ赤にしていった。

父は銀行の頭取になって『鞍山』にひとりで住んでいた。家には母、姉、そして男はわたし一人である。父とは連絡は取れない。あちこちで中国人による暴動が起きた。そんな日が続いていたとき、三番目の姉の婚約者の松尾少尉が突然家にきて、「ここにいては危ないから公主嶺にきなさい」といわれた。そして松尾少尉は、軍に連絡をとってからまた来るといって出ていった。家族は身の回りの衣類だけをり



ユックサックにつめこみ、全財産ぜんざいさんを置き去りにして家を出て、公主嶺こうしゅれいの松尾少尉まつおしょういの官舎かんしゃに向かった。

しかし、官舎かんしゃにはだれもいなかった。官舎かんしゃの周りはシーンとして人影ひとかげもない。中国人ちゅうじんの暴動ぼうどうをおそれて暗くなっても電気をつけられないからよけいさびしくてこわかった。わたしたちは息をひそめてじりじりして松尾少尉まつおしょういのむかえを待った。

そのときである。

「ばさっ、ばさっ」

という音がした。ぼくは姉たちの止める手をふりきってカーテンのすきまから外へのぞいて息をのんだ。

ソ連兵しゆんべいが銃じゆうをかたにかけ、サーベルのような刀で生けがきを切り倒たおしながら庭に入ってきた。

※頭取……会社でいう社長のこと  
※少尉……45ページの注を参照

「お母さん、こわいよー」

わたしも姉もぶるぶるふるえた。

あらあらしい足音がして、くつで玄関をけってソ連兵がどかどかと土足のまま入ってきた。手にはむきだしのままの刀を持っている。おそろしきでふるえているわたしたちを見て、ソ連兵もびっくりしたようだった。

部屋の中を探していたソ連兵は、たなの上のカメラを見つけた。しばらくのぞいていたが何も見えないので捨ててしまった。ソ連兵はカメラを知らないらしい。そのとき、松尾さんがむかえにきてくれた。ソ連兵は突然、軍服を着た日本の将校を見ておどろいたのか、何やら大声でしゃべりながら出ていった。

ほつとして大きなため息が出た。わたしたちには、松尾さんが救いの神様のように見えた。急いで松尾さんの馬車に乗って、猛スピードで走って駐屯地につくことができた。

そこには四十組ほどの将校の家族がいて、わたしたちもその家族といっしょに

移動いどうできるようになった。しかし、いったいどこに行くのかまったくわからなかった。兵隊の間にはさまって家族はたたくもくと歩いた。

笑わらったらおながが空すいた

公主領こうしゅりょうに貨車かしゃが用意よういされていた。貨車には窓まどがない。中は二段だんになっていて、横よこになるだけで立つことはできない。

兵隊たちは「もし南に向かつて走っていたら、日本に帰れるかもしれない。もしも北だったらソ連だ」と話し合っていた。

ガシャと汽車が動きだした。南に向かっている。

「おーい、南だ！ 日本に帰れるぞ！」

だれかがさげんだ。みんなの顔がパツとかがやいた。

しばらくすると、列車がガチャンと止まった。そしてまた走りだした。今度は北

※将校しょうこう……45ページの注を参照

に向かつて走りだした。南に向かっていると思つたのは、線路変更へんこうのためだつたらしい。

貨物列車は数日して満州まんしゅうの北の果ての黒河こくがに着いた。町じゆうは、あちこち弾たまのあとが残つて戦争のおそろしさをしのばせていた。

ソ連と満州まんしゅうの国境こっきょうの黒龍江こくりゅうこう（アムール川）を大きなフェリーで一時間以上かけて渡わたつて、ソ連ソ連のブラゴエチエンスクに着いた。そこからまた貨物列車に乗せられた。ここからがシベリア鉄道である。満州まんしゅうの汽車よりひと回りも大きかつたがトイレがない。貨車の引き戸を開けてつなをはり、おしりを外に向けて背せなか中をつなにもたれかけて用を足した。ふり落とされたら命はない。みんな命がけだ。

シベリア鉄道で西に向かつているわたしたちは、落葉松林からまつばやしを何日も左側に見て走り、バイカル湖バイカルにさしかかると今度は右側に湖を見ながら走っていた。道中、兵隊さんたちが歌つたり、落語で笑わせたりしていた。ぼくはおなかをかかえて笑つた。だけど笑えば笑うほどおなかが空すく。母に「おなかが空すいたよ」といつたら

「ここには何もありませんからがまんしなさい」といわれた。

子供こどもの捕虜ほりよは冒険ぼうけんずき

バイカル湖のほとりで列車が止まった。

やつとご飯になった。喜んでいたらみんなに配られた飯は、ほんのひとにぎりだ。がっかりしていたら、炊事すいじ当番の兵隊さんがわたしに余分よぶんにくれた。

母が「いいのですか？」と聞いたたら、兵隊さんは「わたしにも国にこの子と同じくらいの子がいるんですよ。今ごろ、おなかを空すかせていないかと思ってね」といった。母は目頭めがしらをおさえていた。

シベリア鉄道に一週間ほど乗って、バイカル湖のほとりのイルクーツク②でおろされて、日本軍を収容しゅうようする捕虜ほりよ収容所しゅうようじょに入れられた。

ここには千人くらいの日本兵が入れられていた。

※捕虜ほりよ……27ページの注を参照

收容所の周りは、逃げられないように鉄条網が張りめぐらされていて、自動小銃を構えたソ連兵が見張っていた。冒険ずきなわたしは、ここでもすぐに警戒兵と仲良くなった。

收容所の便所はすごかった。横に長くほった穴に板をしいてするのである。マインス二十五度以下の寒さの中で、便はまたたくまに氷のピラミッドになる。

兵隊さんたちは、便をつるはしでけずってトラックに乗せて捨てに行くのだ。

收容所の食事は黒パンと燕麦。すっぱくてまずくて食べられなかったが、だんだん慣れてしまった。

食事の黒パンは、ソ連人の運転する車に日本の兵隊さんが乗って、毎日、街へ取りに行っていた。ある日、仲良しの兵隊さんにさそわれて、荷台のパンを入れる箱の中にかくれて收容所を出た。初めて歩くイルクーツクの街で、ソ連の子供たちが石けりをしていた。

パンがトラックに積みこまれて帰ることになった。收容所まで何事もなかった

が、入り口にいくるとソ連兵の門番がこわい顔してトラックを中に入れてくれない。出ていったときよりもひとり多いというのだ。どこからきたのだといっていろいろだけれど、わたしの説明は受けつけてくれない。門番はわたしをつかんで引きずりおろした。トラックは中に入り、わたしは収容所の外にひとり残された。収容所の周囲は人家がなく辺りは暗くなって風がふいてきた。どこからともなくおそろしそうな犬が三匹よってきて、わたしを取りまいた。

息ができないほどこわい。収容所の鉄条網のとびらはかたくしまっている。声を出すと犬がおそいかかかってきそうで、ただふるえているばかりで、なみだがポロポロ流れてきた。

その時、門の所で母を見つけた。母はぺこぺこ頭を下げていた。わたしを見のきた後ろめたさからだろうか、門番がすぐに門を開けてくれた。わたしは母にだきついておいおい泣いた。

※燕麦……72ページの注を参照

### 三十八度線を越えた！

收容所<sup>しゅうようじょ</sup>では月に一度、演芸会<sup>えんげいかい</sup>があつた。楽団<sup>がくだん</sup>もあつた。楽器<sup>がき</sup>がないからドラム缶<sup>かん</sup>を輪切りにしたドラムや、なべのシンバルとかそれにハーモニカ。

演芸会<sup>えんげいかい</sup>の最後にはみんなかたを組んで歌う歌があつた。

「帰るまでなみだなんかは出しゃしない、笑って過<sup>す</sup>ごそよ今日一日、イルクーツクの星の夜空を流れる、春のメロデーは……」

みんななみだを流しながら歌っていた。

二十一年の秋。何の役にも立たない四十組の家族は、日本に帰されることになつた。シベリア鉄道を客車に乗せられて東に向かった。貨物列車とちがって何と快適<sup>かいてき</sup>な旅だろうか。すぐにわたしは、ソ連の将校<sup>しょうこう</sup>と仲良くなつた。四日目の真夜中にウラジオストクに着き、それから歩き続けた。のどがひりひり乾<sup>かわ</sup>いたので池の水を飲んだ。明るくなってから見たら、ボウフラのような虫がわいていた。「きや



「！」といつてもあとのまつりだ。

行く先もわからずトラックに乗せられて何時間もゆられているうちに、行きかう人の顔が違つてきた。朝鮮人みたいだ。夕暮れにおろされた所は、朝鮮の都市、咸興だ。付きそつていたソ連軍の将校は、すぐもどるといつて帰つてこなかつた。

辺りが暗くなり始めたころ、日本人援護会の人が出て「みなさんはソ連兵にだまされたのです」と、いわれた。

「ここは北朝鮮なので、三十八度線を越えてアメリカ軍の占領地に入らなくては日本に帰れない」という。それには高いお金を出して、漁船をやとい、三十八度線を海から越えるしか方法がないといわれた。

ひとり当たり五百円はかかるという。「さあ、お金作りだ」と母や姉たちはソ連の将校の家の手伝いや子守をして必死になつてお金を作つた。

ある日、Xデー（密航の決行日）が決められた。

決行日の夜明け。引揚者といつしよにひそかに港町元山から漁船三隻に五十人ず

つ別れて乗った。息をのむような緊張の連続だ。日の出前に出航した密航船は南朝鮮ちようせんに向かった。

元山げんざんから三十八度線を越えるには四時間はかかると聞いていたが、ちようど四時間たったとき、船頭せんどうは突然とつぜんエンジンを止めてしまった。そして二日たっても、三日たっても、船を動かさそうとしない。アメリカ軍の占領地せんりようちの様子をみているのだという。

食べ物どころか飲み水もなくなってしまった。わたしはたえられなくなって、寝るたびにアイスキャンデーの夢ゆめを見た。

船頭せんどうは、「島に人影ひとかげが見えるから船を着けられない」といい、バケツ一杯びがいの水を五百円で売りつけた。仕方なくその水を買って五十人でわけるとひとりコップ半分しかないが、こんなにおいしい水を飲んだのは生まれて初めてだった。母は自分の分をわたしにくれた。しかし、母はだんだん衰弱すいじやくしていく。わたしはなみだが流れて仕方がなかった。そばにいた姉たちが「どうしたの？」と聞くので「お母さん

「がかわいいそう」といったら、姉たちも両手で顔をおおって泣いた。

船が出てから一週間目に、援護会えんごかいの人が「このままでいたらみんな死んでしまう。どこでもいいから船を着けてくれ」とたのんだ。

「やっとアメリカ側に人影ひとかげがなくなった」と夜中に浜はまのような所に船を着けた。

わたしたちはこれで日本に帰れると、おどるような気持ちで先を争っておりた。

船はわたしたちをおろすと、猛スピードで逃にげるように去っていった。アメリカ軍の占領地せんりょうちに入ったと安心して休んでいたら、突然とつぜん、「ダダダ！」と機関銃きかんじゅうのような音がした。おどろいて辺りを見回すと、丘おかの上から銃じゅうをかまえたソ連兵がかけおりにくるではないか。

何ということか、ここはまだ三十八度線より北だったのだ。

アメリカ側に船を着けるのがこわくなって、三十八度線より数キロメートルも北に着けてしまったのだ。

※船頭……船を動かす人

ソ連兵に撃たれるかもしれないとふるえていると、援護会の代表が「みなさん時計を出してください」といった。

みんなで十個集まった。その時計をソ連兵に渡すとソ連兵は銃を置いて、自分の左腕にずらりと並べて、得意そうに口笛をふきながら去っていった。かたずをのんで見守っていたわたしたちは、こしがぬけてしまっただけは歩けなかった。でも、このままいたら危険だと勇気を出して三十八度線を目指すことにした。母は「もうわたしはだめだから先に行つて」といった。

「だれが母親を置いて行けるものか！」姉は母を支え、わたしは母の荷物をかついで必死に歩いた。

赤ん坊を背負った若い女の人が、重くてたえきれなくなって荷物をがけの上から捨てた。荷物はごろごろと転がり落ちていった。もうだれもしゃべるものはいない。あちこちで荷物を捨て始めた。

みなつかれはて、その場に座りこんでしまった。

どこからか機関銃きかんじゆうの音がした！

のんびり休んでいるわけにはいかない。おたがいにはげまし合い、声をかけ合い歩きだした。もう放心状態じょうたいだった。

その時だった。前の方から

「三十八度線が見えたぞ！」

と、声がした。

そのとたん、ぐったりと放心状態じょうたいだった人々がいつせいに立ち上がった。もう速足すみそになっている。

「お母さん！ 三十八度線だつて。もう少しよ」

姉あねに支えられやつと歩いていた母は、無言でうなずいた。

そこには、白いペンキで「38ライン」と書いた板が打ちつけられていた。草の生えている地面には、石灰せっかいで消えそうな線が引かれているだけだった。

大人たちは「世紀の瞬間しゆんかんだ」と感激かんげきの声を上げて「よっころしよ」とまたいだ。

わたしもつき上げてくる熱い思いを胸むねに一いっ気にまたいだ。先に越こえた人がわたしの手をしっかりとぎつてむかえてくれた。うれしきでじんじんと心も体もしびれた。

港町の一角にある引揚ひきあげ者の収容しゅうよう所じょには、千人せんにんくらい日本人にほんじんが引揚ひきあげ船せんを待まちつていた。

わたしたちが収容しゅうよう所じょに入いって二日ふたにち目め。港みなとの方かたから「万歳ばんざい万歳ばんざい」という歓声かんせいが聞こえた。海岸かいがんに日本にほんの引揚ひきあげ船せんが日ひの丸まるの旗はたをかかけて入いつてきたのだ。日本にほんが生いきていた。この平和へいの中で日本にほんという国くにがみやくみやくと息づいている。そう思おもつたとたんわたしわたしの目めから感激かんげきのなみだがあふれてきた。

船ふねは対馬つしま海峡かいきょうを潮風しおかぜを切きつて、一路博多はくた港こうに向むかった。

冒険ぼうけん少年しょうねん、機関車きかんしゃ少年しょうねんの、シベリア抑留よくりゅうの旅たびはこうして終おわつた。

いや、今いまもまだ、わたしはラジオのパーソナリティとして心から平和へいを願ねがいながら、きらきらと新しい人生じんせいの冒険ぼうけんの旅たびを続つづけている。

(原作 青木輝「三十八度線を越えた」)